

国指定史跡

史跡
井寺古墳



井寺古墳 玄室障石(直弧文と円)

嘉島町教育委員会

井寺古墳の概要

井寺古墳は井寺字富屋敷に所在し、嘉島町だけではなく熊本県を代表する史跡の一つである。小丘陵にいただきにあたる高地に位置し、近くには浮島の湧水があるほか、周囲には矢形川ぞいの平野が広がっている。江戸時代の安政4年（1857）の地震で石室の入り口である羨道が発見されたもので、熊本県の古墳としては熊本市釜尾町の釜尾古墳（明和6年・1769発見）とともに古く記録されたものである。大正5年には京都帝国大学の浜田耕作・梅原末治博士らによって調査され、同6年刊の京都帝国大学文学部考古学研究報告第一冊『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』で報告され、一躍学界に知られることとなった。大正10年には内務省指定の史跡となり、これは現在も国指定史跡として引きつがれている。戦後は相当に荒れていたらしく、昭和22年11月には文部省からの視察があり、その時の新聞の見出しには「荒れまかせの井寺古墳」「心なき参観者の落書」「一步入れば惨憺」「視察の一行すらボウ然」などの表現がみられる。これを受けて熊本県では昭和24年と25年の二次にわたる修理を坂本経堯県史跡調査委員らに依頼しておこなっている。このように古くから知られ、装飾文も優秀であるため数多くの文献で紹介されている。

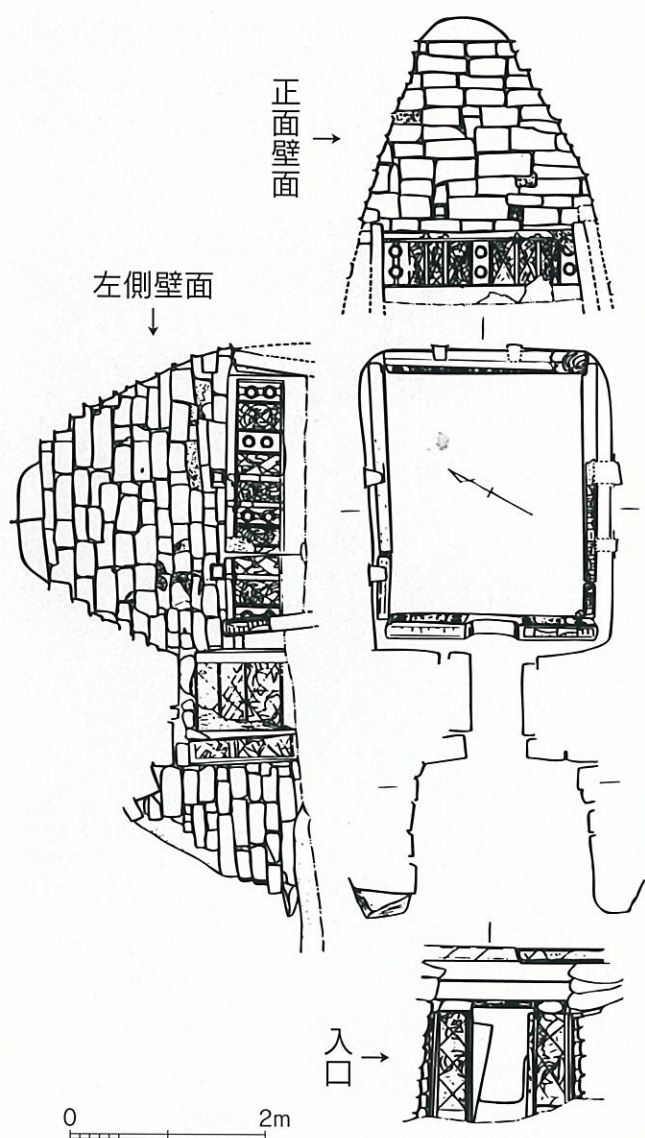
古墳のかたちは円墳で、現状では直径約25[㍍]、高さ5[㍍]ほどであるが本来はそれよりやや大きかったと考えられる。墳丘内には南西に羨道をむけた横穴式石室が築かれている。これは凝灰岩の切り石をドーム状に積みあげたもので、内面には全体に赤色顔料を塗布する。奥および左右の三壁には床上約80[㍍]のところを用石を内側に出して突起を作りだし、もとはこれに石の棚を架していたという。また、天井部には内側を亀甲状に抉りこんだ巨石をのせている。羨道の長さ1.08[㍍]、幅0.56[㍍]、玄室の奥行き2.94[㍍]、幅2.47[㍍]、天井までの高さ3.08[㍍]を測る。羨門の前には奥行き1.5[㍍]、幅1.8[㍍]の前庭部がある。この前庭部については、もと複室の石室であったものの前室の残りとする考えもある。前庭部から玄室奥壁までの長さは5.8[㍍]ほどになる、もし複室の石室であったならば7[㍍]程度はあったと推定される。玄室内には四壁にそって凝灰岩の板石を立てならべて石障としている。そのなかを区画して屍床を作っていたと推測されるが、今はその痕跡はない。

この古墳で著名な装飾は、羨門から羨道側壁および石障上面と内面にみられるものである。装飾文は主となる大きな図柄のものとして三種類の直弧文と車輪状の同心円文、石障の上端や主文様の間をつなぐ幅狭なものとして梯子状文や柱状文それに鍵手文がみられる。これらの線刻された図柄は、もとは赤・青・白・緑の四色で塗りわけられていたようである。それは現状に比べると実に鮮やかなものであったろうと考えられる。

この装飾文の中心となっている直弧文は、直線と弧線を組み合わせた特殊な文様という意味で、方形の部分に対角線で区画してそこに帯をかさねたような弧線を配置しており、その解釈についてはさまざまな説が唱えられている。この文様は装飾古墳の図柄だけではなく、貝製腕輪・刀の柄頭・古墳の中の石枕から銅鏡までいるんなものに使用されている。それは単なる飾りとしてだけでなく、まじないの力をもつものとして認識されていたものようである。

古墳の装飾に直弧文を用いるものは、前期古墳の舟形石棺につけたものや後期古墳の石棺内外および石室の石障に用いたものなどがある。舟形石棺では棺身の外側に簡単な文様をつけたものが、福井県足羽山古墳や大阪府玉手山古墳などにみられる。後期の例は九州地方に集中している。熊本平野周辺では家形石棺の棺蓋に刻んだものとして宇土郡不知火町鴨籠古

墳の例があり、同じようなものが福岡県石人山古墳にもみられる。井寺古墳例のように石障をつけたものには天草郡大矢野町長砂連古墳、福岡県日輪寺古墳および岡山県千足古墳の例がみられる。千足古墳の例をのぞくと、いずれも宍明海沿岸に分布しているという特徴がある。なお、千足古墳の石障の用石は阿蘇溶結凝灰岩を用いていて、九州それも菊池川流域から運んだものではないかと考えられている。そうすればすべてのものがこの地域と関係をもつといえる。



● 井寺古墳石室構造 ●

(羨道) 長さ: 1.08m 幅: 0.56m
 (玄室) 奥行き: 2.94m 幅: 2.47m 高さ: 3.08m
 (前庭部) 奥行き: 1.5m 幅: 1.8m

おわりに

井寺古墳は5世紀ごろの構築といわれ約1500年、その姿をたもち装飾文をとどめてきた。現在の状態自体そうとうに変形・変色したものであるが、なお昔を偲ばせてくれる。しかし、かつては落書きの宝庫であったことが新聞記事などから知られる。この装飾古墳は学術的に重要な資料としてだけでなく、原始美術としても貴重であり、嘉島町だけでなく日本の誇る文化財である。それをぜひとも後世に残す義務を今に生きる私たちは負っているともいえよう。人間が生きるかぎり全ての埋蔵文化財を破壊しないで守るとは、足跡を踏まないで歩くようなもので、絶対保護できるとは限らない。しかし、その場合も法で定められた最低の調査と記録は必要である。

(富田紘一)

井寺古墳の立地・環境

熊本市の中心部から東南の方向へ約8.5キロ、東方に聳ゆる標高431メートルの飯田山支脈の一部が西にながれた先端付近を南北に横切って走る九州自動車道の西約1キロの地点で、水田に囲まれた中にいくつもの小丘陵地が点在する一つに井寺丘陵地がある。北に面する水田地を西に注ぐ木山川と、その南から北に流れる矢形川とが合流して形成された三角洲である。全地域に民家が密集し、そのほぼ中央に位置して、水田地を東、北、西の三方にのぞむ最高部の、標高21.9メートルの頂点に井寺古墳が築かれる。

周辺の水田の多くは湿地地帯で、丘陵裾には到るところに清水が渾々と湧き出し、或はそれが地表のくぼみに停滞して一大湖沼をつくり、広い水田の貯水水源となり、また神聖視されて「浮島さん」の呼称のもとに、池畔には熊野神を勧請して浮島熊野坐神社とし、信仰の中心とする。一方近郷きっての名勝地として南方200メートルに位置する国指定史跡の井寺古墳と結んで、町民の関心が近来急速的に高まってきている。

井寺古墳を中心とする一帯の地域は、弥生中期から後、晩期にかけての遺物を濃厚に包蔵する「富屋敷遺跡」の中心地で、今も畑地の到るところにその遺物が散見され、また集落中の辻々や屋敷の一郭などには中世以降の石造遺物の断片や、特色ある板碑類の数多い分布を見ることができる。

丘陵地南端の台地では、上官塚の円墳をはじめ、さらに南へ歩を運べば御前塚、二子塚の両古墳、劔原古墳、塔の木（箱式石棺）古墳等の小円墳等からなる一大古墳群を形成する。またそれらの群中や周辺は大型弥生土器の甕棺や土器類が出土し、今も断片が散見され、石塚遺跡、劔原遺跡、上官塚遺跡、小迫遺跡、二子塚遺跡等の名称をもって挙げられている。

井寺丘陵地及び南方台地の、さほど広くもない地域において、井寺古墳の造営以前から高い文化の営みがあったことをよく知ることができる。

嘉島町のあらし

「水の郷」“かしま”は熊本県のほぼ中央に位置し昭和30年、旧六嘉村と旧大島村が合併し嘉島村となり同44年に町制を施行した東西に9.8km、南北に3.9km、面積16.66km²の町です。

熊本平野に属した平たんな水田地帯の特性を十分に活かして農業・工業・商業併進の町をめざし「活力と潤いに満ちた魅力ある田園文化都市」の実現に努力しています。

町は、矢形川・緑川・加勢川の各河川に囲まれており、いたるところに豊かで清冽な清水が湧き出し、住んでみたい町として脚光を浴びつつあります。



●嘉島町へは

九州自動車道御船I.C.より(車で5分)
JR九州、南熊本駅より(車で20分)
熊本交通センターより(車で20分)

自然を大切にし、
美しい郷土をつくりましょう。



町の花 コスモス



町の木 もくせい



町の鳥 ひばり